

## ■ 「旧東川駅跡再開発プロジェクト基本構想（案）」について

### 1. はじめに

「旧東川駅跡再開発プロジェクト基本構想（案）」は、これまでの検討経過を踏まえ、現時点までに整理した内容および今後の検討の方向性を体系的に示すものです。

本構想案は、従来の施設整備に主眼をおいた計画とは異なり、東川町の将来のまちづくりを構想し、本プロジェクトの位置付けを明示することを目的としています。

### 2. 地域の抱える課題を解決するプロジェクト P 2～3

「旧東川駅跡再開発プロジェクト」は、東川町の様々な地域資源や文化財、国内外とのネットワークを活用し、将来のまちづくりに向けた課題解決を図る基盤となる場所として旧東川駅跡の活用を図るものと位置づけています。

本プロジェクトの実現に向け、開設後の日常的な利用など、町民が主体的に活用できる場とすること、町の文化資源や文化財を活用することで新たな文化を創出していく場とすること、東川町が多様な主体とのかかわりの中で、まちづくりの課題解決につながる新たな発見や経済活動を生み出していく場とすることを想定しています。

令和5年度までは、本プロジェクトを「KAGU デザインミュージアム」と称していましたが、本プロジェクトはデザインに関する展示施設にとどまらず、まちの様々な資源を活用し、旧東川駅跡一帯を起点として幅広くまちづくりの課題の解決を目指すものであることから、事業の名称について「旧東川駅跡再開発プロジェクト」を新たに用いることとしました。

尚、本プロジェクトは一貫して、「東川町新まちづくり計画 2024」で示している「『対話と参加』によるまちづくり」を基本姿勢として進めています。

### 3. これまでの検討経過 P 4～P 5

これまでに、懇談会、住民説明会・タウンミーティング、有識者会議、東京・上士幌視察、隈事務所、田根事務所によるプラン提示など、複数のプロセスを経て検討を重ねてきております。

7月にはタウンミーティング、11月1日には住民説明会を開催したほか、議会に対しても必要に応じて、構想策定の進捗と考え方を共有しています。

また、議論の具体化と実現可能性の検証を目的に、先進地視察を実施しており、1月13日・14日には、商工会、農協、観光協会、木工会、議員、町職員など計31名で東京都内を訪問し、建築倉庫や「織田コレクション ハンス・ウェグナー展」等を視察しました。展示手法、空間構成、物販・イベント連携、さらには民間主体の運営モデルについて検証を行っております。

1月23日には、懇談会のメンバーを中心に25名で上士幌町を視察し、(株)生涯活躍のまちかみしほろ、(株)Karch を訪問しました。第3セクターの役割分担、

行政との関係性、事業採算構造、持続可能な運営体制の構築プロセスと事業内容・成果・課題などについて確認しております。

これら一連の取組は、単なる施設整備の検討ではなく、文化資源の活用、空間設計の具体化、運営主体のあり方、官民連携の可能性を含め、基本構想の実効性を高めるための検証プロセスと位置づけております。

3月2日には設計会社によるプラン説明会を実施しました。

町内の関係団体より推薦をいただいた29名の委員により構成する懇談会においては、これまで5回の懇談会を開催し、町の課題整理、資源の再評価、ねらい・基本理念・導入機能、機能配置について検討を行い、町が整理した基本構想中間報告について検証を行っています。

懇談会では、「何のための施設か」という目的の明確化が重視され、町民の暮らしに根ざし、学びや交流を生み出す公共的な場とする方向性が共有されています。特に、観光機能への偏りに対する懸念が多く示され、日常的に利用される拠点としての地域交流機能の必要性が確認されました。

さらに、従来型の展示にとどまらず、体験・参加・学びを伴う「使う施設」への転換が求められ、織田コレクションについても保存に加え、活用や発信のあり方が重要な論点となっております。また、子どもや若者を含め、多様な世代が関わり、日常的に利用できる機能への期待が示されました。

空間構成については、レンガ倉庫等の既存資源の活用を基本としつつ、敷地単体で完結するのではなく、中心市街地や既存施設との連携による回遊性の確保など、「町全体で価値を高める」ネットワーク型の視点が求められました。

その他、整備費・運営費の両面における持続可能性の確保や、段階的整備・優先順位付けの必要性が示されています。

#### **4. 既存公共施設 P 6～P 7**

町内の既存公共施設について、行政・地域コミュニティ拠点、文化・学びの拠点、観光拠点、産業拠点として、各施設単体では一定の役割を果たしていると評価される施設も一部あるものの、町全体としての回遊等を促す視点においては課題があるものと考えています。

#### **5. 旭川電気軌道東川線・東川駅跡地について P 8～P 9**

検討してきた機能を実現する場として、構想策定に先立ち、旧東川駅跡に現存する10棟の倉庫の活用検討を行うべく構造調査を実施しました。建物外観の維持を図りつつ利用の有無を含め調査・検証を進めてきましたが、対象建物群は、歴史的建造物という位置付けにおいては、時代的には新しいという指摘もありますが、駅舎が現存しない状況では東川町の発展の歴史をとどめる重要な建物群であると考えられます。

その上で、一部の建物については構造上の問題等から撤去し、その他の建物については一定程度の建物の構造補強等を実施し活用することを仮定とする整理をしております。

## 6. 本構想の政策的・計画的な位置づけ P11~P15

本プロジェクトは、以下の上位計画・関連計画と密接に連動しています。これらを個別施策ではなく、地域の直面する課題を横断的に解決する基盤として位置づけており、「分野横断型プロジェクト」である点を重要視しております。

### (1) 『新まちづくり計画 2024』との関係

本町が直面する以下の7つの課題への対応を前提としています。

- ① 地域コミュニティの持続
- ② 産業振興と外貨獲得
- ③ 子ども・若者の定着
- ④ 高齢者を含めた生活の安心
- ⑤ 交通体系の再構築
- ⑥ 環境・ゼロカーボン対応
- ⑦ 観光と地域資源活用

### (2) 『ひがしかわ価値創造計画』との関係

中心市街地の役割として掲げる「暮らしの魅力の発信」、「人と地域をつなぐ拠点」を具体化する中核施策と位置づけています。

### (3) 文化政策・産業政策との統合

本構想は以下を統合的に扱う点に特徴があります。

- ① 文化政策（織田コレクション等）
- ② 産業政策（家具・農業・観光）
- ③ 教育・人材育成
- ④ コミュニティ政策

## 7. 基本的な方向性 P17

本構想における基本的な考え方は、「町全体がデザインミュージアム」であります。

これは、従来のように施設単体で機能を完結させるのではなく、町内に点在する行政・地域コミュニティ拠点、文化・学びの拠点、観光拠点、産業拠点、自然環境、暮らしの場などを相互に結びつけ、旧東川駅跡を起点（ハブ）としてそれらを回遊し体験することにより、東川町の価値を総合的に感じられる構造を形成するものです。

さらに、その体験を通じて、新たな関係の創出、学びの深化、活動の発展へとつながる「価値の循環」のエコシステムを生み出すことを目指すため、以下の構造により整理します。

### (1) 面（町全体）

町全体を一つのミュージアムと捉え、既存施設、産業、自然、暮らし、文化資源等を価値創出の基盤として位置づけます。

### (2) 線（回遊）

各施設や資源をつなぐ回遊動線を構築し、テーマ性やストーリー性を持った

体験の連続性を創出します。

また、主動線に加え、「裏参道<sup>\*</sup>」等の多様な回遊軸を形成することで、滞在の深化と新たな発見を促します。

※主要動線に対する副次的な回遊ルートを指す

### (3) 点（旧東川駅跡）

旧東川駅跡は、町全体の回遊の起点となる拠点として位置づけます。そのため、単なる導入機能にとどまらず、人・情報・活動が交差し、関係性を生み、価値創出へとつなげるハブ機能を担う拠点とします。また、既存公共施設との接続により、町全体の価値を可視化し、回遊を促進する役割を担います。

### (4) 空間

本施設は、交流・創造・学びが相互に作用し、新たな関係の創出、活動の発展、価値の生成が連続的に生まれる空間とし、集客機能のみを目的とするものではなく、町民の居場所として日常利用を基本としつつ、来訪者との接点を生み出す「日常と交流が両立する拠点」として位置づけます。

## 8. 基本理念・導入機能 P18

基本理念について、本プロジェクトでは、「東川の魅力に触れ、学び、人とながりながら、東川らしい豊かな暮らしを育む拠点」として位置づけております。東川町には、豊かな自然環境、家具・木工をはじめとする産業、そして長年により培われてきた文化や暮らしがあります。

本施設は、これらの資源を単に展示するのではなく、その背景にある歴史や価値を学び、体験し、次につなげていく場として整備するものであり、4つの方針を掲げました。

一つ目は、「東川の暮らしを支えてきた生活・産業・文化の歩みを学べる場」です。過去から現在に至る東川の営みを知ることで、地域の価値を再認識し、次の時代へとつなげていくことを目的としております。

二つ目は、「多様な人々が地域の活動に参加し、人と人がつながる場」です。町民はもとより、町外から訪れる人も含め、多様な主体が関わり合うことで、新たな交流や活動が生まれることを想定しております。

三つ目は、「世界と共に、新しい価値を探究し発信する場」です。東川の魅力を外に伝えるとともに、外からの知見や人材を受け入れることで、新たな文化や価値の創出につなげていくことを目指しております。

四つ目は、「町民にとって日常的でかけがえのない居場所」であることです。本施設は、特別な目的がなくても立ち寄ることができる、日常の延長にある公共空間として、町民の暮らしに寄り添う存在であることを重視しております。

このように、本施設は、「学び」「交流」「発信」「日常」といった要素が相互に関わりながら、人と価値が循環し続ける拠点となることを目指しております。

本施設に導入する機能については、4機能として整理しています。

一点目は、文化に資する機能です。

東川の暮らしの源流である、生活・産業・文化の歴史等を知ることができる機能とともに、織田コレクションを核として、国内外との交流を促進し、新たな文化価値の創出につなげていく機能です。

二点目は、学びに資する機能です。

町内外の多様な主体との協働を通じて、体験や活動、学び合いの機会を創出・支援し、「学ぶ」「働く」「暮らす」といった営みを一体的に捉えながら、定住や新たな地域活動の創出につなげていく機能です。

三点目は、地域に社会的・経済的価値を生み出す機能です。

東川の産業の魅力を広く発信するとともに、多様な主体との連携により、新たな価値を創出していく機能です。

四点目は、コミュニティづくりに資する機能です。

まちづくり団体の活動や取組を広く発信する機能や、町民が日常的に集い、憩い、交流し、イベント等を行うことができる居場所機能を位置づけています。

これらの機能は、それぞれ独立するものではなく、相互に連携しながら、人の流れや活動、価値の循環を生み出す構造として整理し、具体的な機能については、展示・収蔵・交流・居場所等を要素として見込んでいます。

## 9. 町全体がデザインミュージアム P19～P20

本プロジェクトの基本的な考え方として、町全体をウォークアブルな学びと体験の場とする「町全体がデザインミュージアム」の考えのもと、旧東川駅跡に導入する機能については、町内既存公共施設が有する機能と役割を検証したうえで、これらとの連携・補完を基本としつつ、既存施設のみで十分か、新設及び充足すべきかを検討したうえで、まち全体としての機能の深化や相乗効果創出を図ることを基本とします。

既存施設が担っている機能については、引き続き各施設の役割として位置づけた上で、旧東川駅跡は、それらをつなぎ、補完し、一体的に機能させるほか、連携による相乗効果を担うものとして整理しております。

回遊については、交通・情報・プログラムを組み合わせた実効的な仕組みとして、基本計画において具体化を見込んでいます。

## 10. 機能配置の考え方 P21～P22

旧東川駅跡は、文化創造エリアと地域交流エリアという2つのエリアで構成されることを見込んでいます。

文化創造エリアは、文化資源の保存・研究・活用・発信を担い、町と世界をつなぐ役割を担い、織田コレクションをはじめとする文化資源の収蔵、展示、価値発信を機能としています。

一方、地域交流エリアは、町民や来訪者が集い、活動・交流するなど、日常的に利用できる場としての役割を持つエリアです。町民の日常的な利用や活動を支える交流、居場所、情報発信、イベント、町の価値を創出するコミュニティビジネス、簡易な飲食や物販、路面電車の展示などを機能としています。

旧東川駅跡は、これら2つのエリアの機能が交わることで、世界と共に新しい価値を探求し発信する構造とし、文化と日常、町内と町外、学びと活動が交差することで、本施設の価値が最大化されることを目指します。

理念、機能、空間構成を一体として整理し計画を進めることで、旧東川駅跡が「東川の魅力に触れ、学び、人とつながりながら東川らしい豊かな暮らしを育む拠点」として位置づけられると想定しています。

具体的な空間構成として、ストレージ（約2,500㎡）、展示・ロビー・オフィス（約600㎡）、パブリックスペース（約700㎡）、多目的ホール（約300㎡）、屋外広場といった構成を見込んでいます。

特にストレージについては、織田コレクションを中心とした収蔵機能として位置づけており、公開型収蔵や既存拠点における展示との連携も視野に入れております。一方、パブリックスペースや屋外広場は、町民の日常的な利用を支える町内に点在する居場所機能の中核として位置付けます。

既存倉庫の活用について、レンガ倉庫、石積倉庫の4棟については、原則として保存・活用とし、不足する機能については新築で補完することで、歴史的価値と機能の両立を図ることとしております。

その他、プラットフォームや記念碑の活用、交通動線の検討、道路の交通制限の検討、収蔵対象文化財の整理なども必要な事項として見込んでいます。特に収蔵については、織田コレクションは駅跡を主たる収蔵拠点としつつ、他の文化財は既存施設との役割分担を前提とするという整理としております。

## 11. 今後の検討 P23～27

基本構想については、施設の詳細な機能や配置を定めるものではなく、「町全体のまちづくりの方向性を示すもの」として、拠点の位置づけ（文化／観光／日常）、デザインミュージアムの解釈と範囲、導入機能としており、本構想で整理した考え方を基に、基本計画において、規模・配置、事業手法（直営／指定管理等）、運営主体、交通・駐車場、財政スキーム等の詳細化を見込んでいます。

本構想は施設の詳細な与件を示すものではなく、方向性と考え方を示すものであり、規模・事業費等はあくまで検討の前提条件としての試算を行うものです。

旧東川駅跡再開発における現時点での事業費および運営費の試算について、現段階の条件および仮定に基づくケーススタディであり、今後の設計検討により変動する可能性があるという前提で整理しています。

概算事業費は約36億円～45億円規模と試算。地域未来交付金（20億円規模）や起債、一般財源を組み合わせた多角的な財源構成を見込んでおり、総事業費の約6割以上を国庫補助、地方交付税でカバーするほか、実質的な町負担分14.6億円についてはふるさと納税による確保を見込むなど、持続可能な財源モデル

を検討するほか、整備費については、約 40 億円規模への最適化を前提に検討を進めます。

なお、年間の運営費については、延床約 4,000 m<sup>2</sup>を前提として、年間約 1.1 億円程度と試算しております。

本施設は単体収益による自立運営を前提とするものではなく、交流人口の創出、地域内経済循環、関係人口の拡大等の波及効果を含めた事業として評価する位置づけを見込んでいます。

事業運営については、町の現状や本事業の趣旨を踏まえ、例えばまちづくり会社による運営への参画等の可能性も視野に入れるなど、行政単独ではなく、民間・地域主体との役割分担を視野に入れた持続可能な運営体制の構築を検討します。

本プロジェクトの検討にあたっては、対象地周辺の住民、特に東町 2 丁目の皆様の生活環境への影響について、最重要事項の一つとして位置づけます。今後の基本計画及び設計段階においては、動線分断の回避、交通影響、騒音・景観、既存生活機能の維持など、地域住民への説明及び対話の機会を確保し、その意見を十分に踏まえながら、生活環境との調和を最優先として検討を進めるものとします。

今後のスケジュールの見通しについて、一般的な例に置き換えて整理したもので、今後の検討状況や採用する事業手法により、スケジュールは異なる可能性があります。

基本構想を策定した後、本事業にかかわる導入機能の詳細化、施設計画、管理運営計画、概算事業費、事業手法等の検討を通じ、基本計画として取りまとめます。その後基本計画で整理した条件に基づき、設計・建設・開業準備を、令和 9 年度以降に進めることを見込んでいます。また、整備は全体を一度に行うのではなく、初期整備においては、コア機能から段階的に機能拡張を図る可能性もあり、施設の供用開始も段階的になることも想定をしています。

町では、引き続き丁寧な検討を重ねながら、懇談会・町民・議会に情報共有を行いながら、町民の皆様とともに、東川らしい再開発プロジェクトの実現に向けて取り組んでまいります。

## 12. まとめ

本構想は、「町全体を舞台とした地域価値共創の仕組みをデザインするプロジェクト」として、「施設をどうつくるか」ではなく「持続的に町の価値をどう高めるか」という問いに対する現時点での仮説です。

第 6 回懇談会では、委員の皆様から率直なご意見をいただき、基本構想（案）としてまとめて参りたいと考えておりますので、引き続き、ご協力賜りますようよろしくお願いいたします。